

「シンガポール派遣参加報告書」

京都大学文学部 3 回 柚江夏弥

私は、これまで海外留学の経験がありませんでした。

今回のシンガポール派遣で、私は初めて、海外で勉学をするという経験をさせていただいたこととなります。このような私の立場から、今回の派遣について、報告させていただきます。

①学習成果（今回の派遣に参加する前とした後とで、留学、大学での学習、国際理解への意欲に関して、自分どのような変化が起きたか、今回の派遣に参加して、次の海外留学についてどのような関心・計画を持つようになったかなど）

・ 留学への意欲

本派遣に参加する以前は、留学への意欲は、決して高いものではなかった。留学には少なくない費用がかかるし、慣れない環境下で、とりわけ外国語を使って勉学をするということに、現実味を感じられなかったのである。それよりも、まずは、自分の学びたいことを日本語でしっかりと理解していくことが先決だという意識があった。

しかし、本派遣に参加してみて、留学ということが、自分にとって、具体性を帯びたものになった。日本とは異なる言語環境、文化環境で学ぶことは、それ自体で、学問の扱う課題やそれへの理解を、与えてくれるものだと実感することができたからである。派遣参加後のいま、ただちに留学への意欲が湧き上がった、というよりは、これから自分なりに勉学をすすめるなかで、留学というひとつの仕方を、現実的な選択肢として感じられるようになったと思う。

・ 大学での学習への意欲

本派遣に参加する以前は、とにかく自分の感受性に合うものに、目が行っていたように思う。また、外国語の勉強は、外国語の書物を読むためだ、という意識が強かった。

本派遣に参加し、講義や現地の学生との交流をつうじて、自分の感受性は「日本」で育てられたものなのだ、ということを目でなく身をもって感じるようになった。そして、哲学という営みは、そういう人間のありようを自覚化し、ともに触発しあいながらつくりあげられていくものなのだ、と感じた。さまざまな背景を持つ人々と、もっと深くコミュニケーションをしてみたいという気持ちが高まった。語学の勉強に関しては、読むという受動的な側面だけでなく、伝えるという能動的な側面を意識して取り組みたいと思えるようになった。また、外国語でもしっかりと説明できるように、自分の考えをさらに整理しながら勉強をしていきたいと思った。

・ 国際理解への意欲

人々の結びつきがますます世界に広がっている現代において、国際理解が重要である、ということは派遣参加以前から分かっていたものの、それへの意欲自体は高いとはいえないものだった。

派遣に参加し、多様な文化が会おうシンガポールのようすを見て、ある意味で国際理解というものを身近に感じられるようになったと思う。気候や食生活といったことは現地での経験がいちばんであると強く感じた。人々のものごとに対する感覚や社会のつくり方などを、短期間ではあれ、全体感をもって体験できたことは、貴重なことであったと思う。

・ 次の海外留学についての関心や計画

次の海外留学については、語学留学も含めて、前向きな関心を持つことができるようになった。

具体的な計画はまだ考えていないが、次の機会がもしあるとすれば、もっと発信力を高めた状態で臨みたい。そのためにも日頃からスピーキングやライティングを意識した語学学習をしていきたいと考えている。

②海外での経験

今回の派遣の窓口となってくださった Simon Duffy 先生のアレンジメントで、私たちは Yale-NUS College の Cendana College に滞在させていただいた。私たちが宿泊したのは 26 階建て(!)の寮の 7・8 階である。個室には机・ベッド・クローゼット・棚があった。天井には大きなファンがついており、これで暑さをしのぐことができた。エアコンは課金制となっていたため、私は使用しなかった。寮や学内の部屋・門は学生証=IC カードでロックを解除するしくみとなっており、私たちはゲストの学生証を使わせてもらった。寮には共有の食堂や洗濯室、ウォーターサーバーが完備されていた。

Yale-NUS College は、いくつかある寮を含みこんだかたちで設計されており、非常に充実した「街」となっていた。寮から 5 分ほど歩いたところに、U Town という名前の、一般の人も利用できるフードコートがあり、私はふだんはここで食事を取った（去年は寮の食堂を利用させていただいたようである）。このフードコートを含む建物には、コンビニエンスストアやドラッグストア、スポーツショップ、そしてジムのような施設やクライミングウォールがあった。命綱を付けて練習する人たちの、2 階の吹き抜けから眺めながら、フードコートへと歩いたことが、印象に残っている。フードコートには Japanese、Chinese、Indian、Indonesian、Eastan など各地域のコーナーがあり、シンガポールの多様性を感じた。

他にも、寮近くの建物には Battery という休憩室あるいは談話室があり、キッチン・ビリヤード・テレビ・ゲーム・楽器などが置いてあった。最終日に少し利用させてもらったが、冷房がとても効いていて、ここでリラックスしているのだなと思った。このような共有スペースでは、イベントが行われることもあるようだった。

私たちが受講した講義は、Yale-NUS ではなく NUS のキャンパスで行われることもあり、そこへはバスで移動した。10 分ほどで着く場所である。そちらのキャンパスには哲学科の院生室があり、現地の院生の方々と交流したり、市内見学への待ち合わせをしたりした。

学外では、現地の学生とともに、市内や文化施設を見学した。公共交通手段のバスや電車では Easy link という IC プリペイドカードを利用した。タクシーだと、車両によって使えたり使えなかったりするようである。

市内では、大学近くやチャイナタウンなど各地のホーカー（フードコートのこと）での食事が印象に残った。半分屋外のような感じのところに、屋台がたくさん並んでいて、いろいろなメニューを好きに楽しめる。私はビーフンや鶏肉料理を食べたりした。がやがやとした雑多な雰囲気印象に残っている。ホーカーだけでなく名物料理を食べたりもし、やはり食事から文化を感じたものだった。熱帯の気候に合わせた、スパイシーなものも多かった。

文化施設としてはマーライオンを見たり、ビーチを散策したり、植物園までサイクリングをした。非常にきれいに整備されていたので、シンガポールの経済的な豊かさを見るようであった。国立博物館の周りを散策してみると、植民地時代の雰囲気を残した建物群があった。戦争記念公園ではそれぞれの民族を象徴する 4 つの柱によって戦没者を祈念されており、戦争の歴史を感じた。

シンガポールでは、英語が共通語とはいえ、中国語で喋っている人も多し、ホーカーなどでは少し独特な発音の英語にも触れた。言葉が通じにくいことはあれど、（むしろそうだからこそ、）多様な背景を持つ人々が、臆せず積極的にコミュニケーションしようとする姿は印象的だった。

以上のような経験を通して、日本とは異なる文化や生活感覚を感じることができた。現地の学生との交流を通じて、英語によるコミュニケーション能力が向上するとともに、課題も明確に感じることができた。

③プログラム内容

6人の先生による講義と、NUS・京都大学合同の大学院生カンファレンスが行われた。

講義は、それぞれの先生方の専門の入門講義といった趣のものが多く、さまざまな領域について触れることができた。テーマは、心の哲学(2コマ)・確率の哲学・ヒューム・アリストテレス・カントであった。どの講義も私たちのために用意してくださったもので、一部には現地の学生も参加されていた。講義に先立ち、事前に読んでおくマテリアルが送られてきていて、私たちは、現地でも予習会をして講義に備えた。その予習会における先輩方のアドバイスのおかげで、授業の重要なポイントはつかめたものの、効果的な質問をすることができず、語学力の上達が必要だと痛感した。講義のスタイルについては、日本の大学とそれほど違いは感じられなかった。

大学院生カンファレンスでは、両大学の院生による発表が行われ、両大学の先生と学生による質疑応答・議論がなされた。本学の出口教授も来学された。異なる環境下で勉強してきた人たちが互いの成果に耳を傾け、意見を交換している様子に感銘を受けた。自分のこれからの勉学への意欲が高まるのを感じた。

④進路への影響について

私は大学院への進学を考えている。本派遣によって、これからの勉学にあたり、どの程度の語学力が求められるかということの手がかりを得られたと思う。大学院は日本の大学院へ進学する可能性が高いが、留学という選択肢に対しても具体的なイメージをつかむことができた。もし将来留学の機会があれば、今回の経験を大いに生かすことができると思う。今回の派遣を機に、一層勉学に励みたいという思いを新たにした。このような貴重な経験ができたことに本当に感謝している。ありがとうございました。